



西岡水源池は身近な昆虫パラダイス！

2006.2 No.26

札幌中心部から豊平区の混みあった住宅街をぬけると、西岡公園（西岡水源池）の静かな水辺に出ます。ヘイケボタルの見られる場所としても知られているので、聞いたことがある、行ったことのあるという人も多いかもしれません。

私が調査を始めたきっかけは、幼い頃から親しんでいた公園にはどんな昆虫や、その他の生き物が棲んでいるのかという好奇心からでした。しかし、トンボ以外の昆虫の記録は古いものが多く、私の予想よりもはるかに少ない記録しかありませんでした。そこで、自分で調べてみようと思ったのです。

西岡水源池は月寒丘陵を北に流れる月寒川の上流部にあり、今から97年前、1909（明治42）年に自然地形をそのまま利用して作られた貯水池です。現在は貯水池の役目を終え、四季を通して野鳥や昆虫の観察できる公園として多くの人に利用されています。住宅街と隣り合っていますが、トンボの種類が多いことで専門家の間では全国的に有名です。

2003年に私の調査が始まりました。はじめは1年で出来るところまでやろうと思っていたのですが、やっていくうちに多くの発見があり、また、調べても調べてもまだまだ多くの生き物がいることが楽しくて、その後も調査を続けました。さらに、調査をしている間に多くの人との出会いがありました。公園に遊びに来ている人や、バードウォッチングをする人、虫捕りに来た親子や写真家、そして時には昆虫研究者にも……それぞれ立場は違いますが、公園に対する親しみや愛情を感じました。

調査は基本的には昆虫を見つけて網で採ることが中心ですが、トラップ（罠）も仕掛けます。今回は地面に紙コップを埋めて落とし穴にする、ピットホールトラップという方法を使いました。

3年間の調査の結果、400種近い昆虫を確認し、標本の数700点を超えました。また、初夏～秋にかけて連続して西岡水源池を訪れたことで、現在の西岡水源池のトンボ相の全容が見え始めてきました。しかし、昆虫はとてまたくさんの種があり、よく似ているものもたくさんいるので、私の力では名前を調べきれず、専門家の方々にお願いして確認していただいたものもあります。それでもまだまだ名前が分からないものがたくさんあるのだから驚きです。そして自分でも驚いたこと下記のような重要な記録を得ることができました。

北海道内初記録	オオモンキカスミカメ（カスミカメムシ科）
石狩管内初記録	ホソミモリトンボ（エゾトンボ科）
	モンキツヤミズギワカメムシ（ミズギワカメムシ科）
	オオナガマキバサシガメ（マキバサシガメ亜科）
札幌市内初記録	セアカアメンボ（アメンボ科）



北海道版レッドデータブック希少種 サラサヤンマ

調査中、残念なこともありました。それは、外来種問題の現状を目の当たりにしたことです。カブトムシやクワガタムシなどの飼育用マット（おがくずのようなもの）が堂々と捨てられていたのです。カブトムシはもともと北海道にはいませんでしたが、ペットとして持ち込まれたものが逃げたり、逃がされたりして野外に棲み着いてしまいました。飼っていたものを野外に放すと、自然生態系に影響を与えます。他にも“ミドリガメ”や、アライグマなどさまざまな生き物が帰化（もともといなかった土地に棲み着くこと）してしまっています。私もいろいろな生き物を飼っていますが、みなさんも一度飼った生き物は最後まで面倒をみるようにしましょう。

それ以外にもさまざまな問題がありますが、自然を壊したいと思う人はいないと思います。人間の身勝手のせいで環境を壊していくのはもう終わりにしたいものです。人と自然とが上手く付き合っていき、残された自然を大切にしていきましょう。（刀禰浩一 北海道札幌西高等学校2年）

～大平原の小さな博物館～

カナダ・アルバータ “ハイウェイ3号線” から

北川 芳 男 (理学博士、元北海道開拓記念館学芸部長)

④ 最終回 大地すべり「フランク・スライド」

ピンチャー・クリークからハイウェイ3号線を40kmほど西に進むとフランクの街に入るが、その少し手前で道路の両側に膨大な量の巨礫が積み重なり、丘状になっているのが見られる。ここが、アルバータの歴史遺産「フランク・スライド」(地滑り)の現場である。

世紀の大地滑りは、フランク市街地の南にそびえるタートル山で1903年に発生した。タートル山の中腹より上位は古生代デボン紀の石灰岩層であるが、山麓は白亜紀層(頁岩・砂岩・石炭層など)であり、上下の地層の時代が逆転している。これは、衝上断層の動きで石灰岩層が白亜紀層の上へのし上がったからである。また、この地域は炭鉱地帯で、当時は白亜紀層の挟炭層で採掘が行われていた。

タートル山には、南ピーク(標高2192m)と北ピーク(標高2104m)があり、両者は約580m離れている。1903年4月29日、午前4時10分、大音響とともに南と北の2つのピークを含むタートル山頂稜から、およそ8200万ト(約3000万m³)という膨大な量の石灰岩が東斜面を滑り落ちた。雪崩のように滑り落ちた巨礫群は、わずか100秒足らずで山麓の炭鉱事務所や炭坑入口、鉄道線路、道路や町の一部を破壊しながら、幅およそ1kmの谷を横切り、向い側の谷壁まで達し、一部は比高80mの崖にも乗り上げた。巨礫群はクロスネット川谷の約3km²を深さ30mで埋め尽くしたのである。

この大地滑りの通り道にあった家々で寝込みを襲われた70人の人々が犠牲になった。当時、炭坑内に閉じ込められた17人は自力で坑口に穴を開け、14時間後に脱出した。また、現在のハイウェイ3号線とそれにほぼ並行して走るカナダ太平洋鉄道の線路は、約2kmにわたって埋没してしまった。

このように、フランクの人々の生活を破壊した大

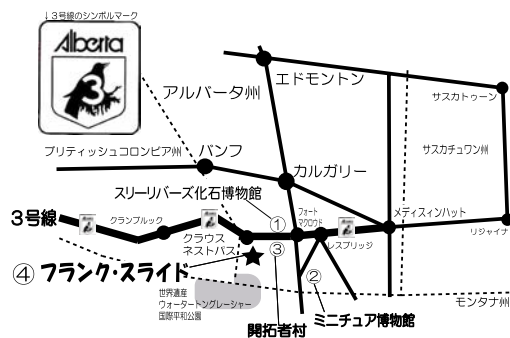


図 アルバータ州南部の道路地図(①、②、③は23号、24号、25号で紹介した博物館)



地滑りであるが、その主な原因として次ぎの3つが考えられている。1つにはタートル山の基本的に不安定な地質構造、2つめは石灰岩採掘に伴う爆破などによる上部岩石への影響、3つめに当時の気象条件(1903年4月は気温が異常に高く、融水が岩石の割れ目にたくさん流れ込み、夜間の急激な気温低下で割れ目内の水が凍結膨張した)である。いずれにせよ、最終的に滑りの引き金になった要因が何か? 雪崩のようなスピードで流下したメカニズムがどんなものであったか? などについては十分解明されていない。

ともあれ、これだけの自然災害跡地を歴史遺産として残せるとは、すばらしいことではないだろうか。現在は、谷を横切った巨石堆積物の台地上に「フランク・スライド解説センター」がある。ここからタートル山の崩落現場や巨石堆積物が観察できるほか、建物内にはフランク・スライドについてだけでなく、地域の歴史を紹介する映像展示もあり、いくつかの教育イベントも行っている。さらに、野外には巨石堆積物観察用の小道もある。